

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008～2009

課題番号：20830011

研究課題名（和文）操作が二者関係の維持に及ぼす影響の検討

研究課題名（英文）The influence of manipulation tactics to maintain relationship.

研究代表者

寺島 瞳（TERASHIMA HITOMI）

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・助教

研究者番号：30455414

研究成果の概要（和文）：パートナー関係維持方略尺度短縮版（Buss, Shackelford & McKibbin, 2008）を邦訳して、質問紙調査を実施した。その結果、本尺度は信頼性・妥当性を有することが明らかにされた。調査対象者の 20%～40%が、相手がどこにいるか確認する、相手の時間を独占する、別れると脅す、携帯を見るなどの否定的な関わりを過去に一度は行っていた。また、これらの行動が最終的には暴力につながることが明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：The Japanese version of Mate Retention Inventory short form (Buss, Shackelford & McKibbin, 2008) was developed. Therefore, the validity and reliability of this inventory was established. Results indicated that approximately 20% to 40% of the participants monitored their partner, monopolized the partner's time, threatened to leave, or has checked the content of a partner's cellular phone at least once. The results indicated that maintaining a relationship with a partner is related to violence.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	1,170,000	351,000	1,521,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,770,000	531,000	2,301,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：臨床心理学

キーワード：対人行動、操作、ドメスティック・バイオレンス

1. 研究開始当初の背景

ドメスティック・バイオレンス（DV）などに代表される病理的な二者関係に特徴的

な問題は、一度成立した関係性から抜け出しにくいことにある。特に、被害を受けているにも関わらず、自らに非があるように思われている被害者が多い。そのような関係性の成立には、操作という対人行動が深く関わっていると考えられた。操作をする側は相手の不安や罪悪感、劣等感などをうまく利用して相手を自分のもつにつなぎとめる。よって、このような状況を作り出すことに操作がどのような影響を及ぼしているか詳しく解明することは急務であった。操作が関係性の形成・維持に及ぼす影響を検討することで、その関係性から逃れるための方法が明らかになることが期待された。しかし、これまで操作についての実証的な検討はあまりなされてきていなかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、親密な二者関係の間で操作がどのように生起しているかを明らかにし、また、操作が病理的な二者関係の形成・維持に果たす役割について検討することであった。

3. 研究の方法

(1)文献研究

まず、操作に関する文献を概観した。操作に関する研究としては、①B群人格障害に特徴的な操作に関する臨床的指摘、②アサーション理論における一般的な対人行動としての操作の概念化、③進化心理学・社会心理学における実証的検討などがある。B群人格障害に特徴的な行動としては多くの臨床的指摘があるが、実証研究が少ない。また、アサーション理論において、日常的に良く見られる行動として操作が位置づけられたが、やはり実証的検討に乏しい。よって、本研究では主に③の進化心理学・社会心理学における操作の実証的研究について文献研究を行った。

文献検索にあたっては、恋人・配偶者間の操作を測定する尺度を開発した Buss(1988)の論文に着目した。この文献を引用しているほかの文献を収集して、内容の検討を行った。

(2)質問紙調査

文献研究をもとにして、全部で3回の質問紙調査を行った。大学生を対象に2回、一般成人を対象に1回の調査を行った。

4. 研究成果

(1)文献研究

Buss(1988)は、恋人や配偶者を自分のもつにひきつけておくよう操作する方略を測定する尺度として、19分類 104項目からなるパートナ

ー関係維持方略尺度 (Mate Retention Inventory)を開発した。恋人を中傷する、脅迫する、常に監視する、他の男性と会わせないようにする、自分が恋人を所有していることを様々な方法でアピールするなどの行動が含まれている。この尺度は、2領域、5カテゴリー、19方略からなる。図1にその内容を図示する。2つの領域には、相手に対する操作とライバルに対する操作と命名されており、それぞれいくつかのカテゴリーが属している。カテゴリーには方略がいくつか属する。Buss, Shackelford & McKibbin(2008)により短縮版が開発されており、短縮版は19の方略につき2項目ずつの38項目からなる。

先行研究では、パートナー関係維持方略を用いることは実際にパートナーをつなぎとめる役割を果たしていることが示されている (Buss,1988)。しかし、男性が行うパートナーの監視や感情操作などは暴力の予測因子となることが明らかにされている (Shackelford, Goetz & Buss,2005)。また、男性において、当初は浮気への疑いであったが、パートナー関係維持方略へ発展し、最終的に暴力につながる階層構造も示されている (Kaighobadi,Starratt & Shackelford, 2008)。暴力につながる行動としてのパートナー関係維持方略について明らかにすることで、暴力に至る前の介入が可能となると考えられた。

日本において、似たような尺度はこれまでにない。よって、まずはパートナー関係維持方略尺度の日本語版を作成する必要がある。また、暴力との関連はいずれも男性に対する調査結果であり、女性が行うパートナー関係維持方略についても検討する必要がある。

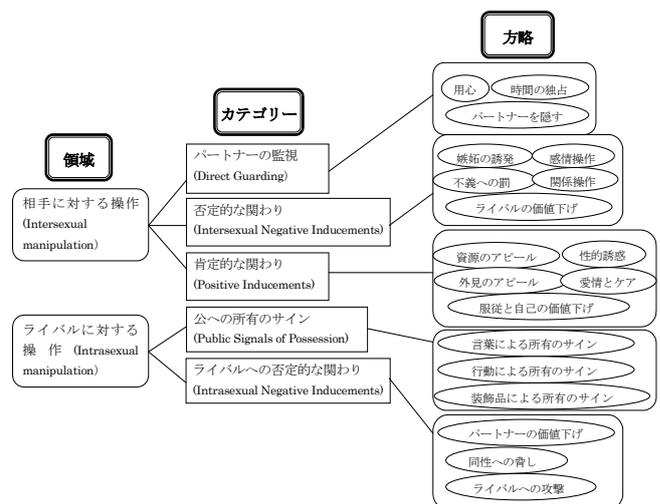


図1 パートナー関係維持方略尺度

(2)質問紙調査

①質問紙調査の目的

文献研究を受けて、本研究ではまず Buss, Shackelford & McKibbin(2008)が作成したパートナー関係維持方略尺度短縮版の日本語版を作成し、信頼性・妥当性を検討することを第一の目的とした。次に、パートナー関係維持方略の生起頻度および、パートナー関係維持方略へ影響する要因について明らかにし、さらにパートナー関係維持方略の使用が相手への暴力や関係の維持につながるというモデルの検討を行うことを第二の目的とした。

②調査対象者

a)データ 1

平成 21 年 6 月に行った。関東圏内の大学生 343 名のうち異性と交際した経験のある 182 名（男性 92 名、女性 90 名、平均年齢 19.14±1.66 歳）を分析対象者とした。

b)データ 2

平成 21 年 10 月に行った。対象者は関東圏内の大学生 191 名のうち、異性と交際経験のあった 149 名（男性 61 名、女性 88 名、平均年齢 21.93±7.49 歳）を分析対象者とした。

c)データ 3

平成 22 年 1 月に行った。全国の一般成人 512 名（男性 254 名、女性 258 名、平均年齢 38.79±9.74 歳）。社会調査会社（株）マーシュの登録モニターに対して、郵送調査を用いて行った。既婚・未婚と性別の内訳を表 1 に、年代・性別の内訳を表 2 に示した。

表1 配偶者・交際相手と性別のクロス集計表

	男性	女性
配偶者	96	102
現在の恋人	104	103
過去の恋人	54	53

表2 年代と性別のクロス集計表

	男性	女性
18~20代	49	52
30代	83	81
40代	78	84
50代	44	41

③質問紙の構成

既婚者には配偶者について、未婚者で現在恋人がいる場合は現在の恋人について、未婚者で現在恋人がいない場合は過去の恋人についてそれぞれ回答を求めた。

全てのデータに共通して、パートナー関係維持方略尺度短縮版（Mate Retention Inventory Short Form : MRI-SF, Buss et al.,2007）を実施した。日本語版の作成には以下バックトランスレーションの手順を踏んだ。

- ・ 原著者に日本語版作成の許可を得た。
- ・ 著者が日本語に訳した。
- ・ 心理学を専攻している大学生 5 名が表現の

適切さを確認、修正した。

- ・ 科学論文専門の翻訳会社に依頼して再翻訳した。
- ・ 再翻訳された項目について原著者のチェックを受けて修正した。

その他、分析に用いた項目をデータごとに以下に示す。

a)データ 1、2、3 共通

年齢、性別、交際・婚姻期間

b) データ 1、2 共通

日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（安藤、曾我、山崎、島井、嶋田、宇津木・大芦・坂井、1999）24 項目、5 件法。

c)データ 2、3 共通

青年期用対象関係尺度(井梅・平井・青木・馬場、2006)のうち、見捨てられ不安を測定する尺度 7 項目 6 件法。

d)データ 3 のみ

- ・ 人口統計学的変数
居住地、最終教育歴、同居家族の有無、飲酒喫煙習慣
- ・ 恋人（配偶者）との関係
相手との年齢差、相手との心理的距離を測る Inclusion of other in self scale : IOSscale (Aron,Aron, & Smollan,1992) 1 項目 交際始め時点、関係維持動機 (Rusbult,1998)交際始め時点 7 項目、関係満足度(高坂、2008) 交際始め時点 1 項目、相手との心理的距離を測る Inclusion of other in self scale (IOSscale) (Aron,Aron, & Smollan,1992) 現在・もしくは交際終わりの時点 1 項目、関係満足度(高坂、2008) 現在もしくは交際終わりの時点 1 項目、女性に対する暴力スクリーニング尺度の加害側に項目を修正したもの(片岡、2005) 過去 1 年間もしくは交際終わる前 1 年間 7 項目
- ・ 自身の性格特徴など
不安・抑うつ尺度 K6 (古川、2002)、ソーシャルサイズ Tangible assistance scale (TAS) (Bleke,McKay,1986) 1 項目

④結果と考察

a)項目分析

パートナー関係維持方略尺度短縮版の項目の平均値、標準偏差、度数を表 3 に示す。データ 1、2、3 のうち欠損値があったデータを除く 815 名を分析対象とした。Buss & Shackelford (1997) における 214 名の夫婦を対象にした調査の平均値とおおむね同様の傾向であった。先行研究では、肯定的な関わりと、公への所有のサインで 1 以上の平均値、その他の否定的な関わり、パートナーの監視、ライバルへの否定的な関わりでは 1 以下の平均値であった。本研究においては公への所

有のサインが低めであるが、ほぼ同様の結果であるため、特に大きな文化差はないものと推察される。肯定的な関わり以外は一度も行ったことがない人のパーセンテージが40%後半から90%を超える項目もあった。特にライバルへの否定的なかかわりに関しては、80%~90%が一度も行ったことがないと回答している。しかし、逆に10~20%がライバルを牽制し、20%~40%は相手をつなぎとめるために監視、時間の独占、別れるという脅しなどの否定的なかかわりを行っていた。これは少ない値ではないと考えられる。項目内容の特性から正規分布をすることが期待されず、先行研究でも全ての項目を分析に用いているため、本研究でも全項目を以下の分析に用いた。

b)信頼性の検討

尺度全体の信頼性は $\alpha=.90$ と高い値がえられた。先行研究における下位尺度に関する信頼性係数を算出した。その結果、パートナーの監視 $\alpha=.61$ 、否定的な関わり $\alpha=.79$ 、肯定的な関わり $\alpha=.78$ 、公への所有のサイン $\alpha=.69$ 、ライバルへの否定的な関わり $\alpha=.63$ という結果であった。おおむね十分な値が得られ、パートナー関係維持方略尺度の信頼性が確認された。平成22年5月に再検査を行い、再検査信頼性についても今後検討する予定である。

c)妥当性の検討

妥当性の検討のため、関連があると仮定される各変数との相関関係を検討した。交際期間、攻撃性、見捨てられ不安、恋人・配偶者への暴力との相関係数を算出した。相関係数を表4に示す。

データ1、2の大学生を対象としたデータでは、交際期間とパートナー関係維持方略尺度の相関係数は $r=.25$ で有意な正の相関があった。下位尺度においてもライバルへの否定的関わり以外で正の相関が見られた。なお、交際期間の平均値は13.10ヶ月($SD=12.28$)であった。しかし、データ3の一般成人を対象としたデータでは、交際・婚姻期間とパートナー関係維持方略尺度とは肯定的な関わりでむしろ負の相関が見られ、その他は無相関であった。婚姻・交際期間の平均値は98.50ヶ月($SD=100.55$)であった。

攻撃性とは、パートナー関係維持方略尺度全体と、攻撃性の下位尺度の短気($r=.12$)および言語的攻撃($r=.14$)と正の相関がみられた。下位尺度の中では否定的な関わりとの間で関連が見られた。

見捨てられ不安とは、パートナー関係維持方略尺度全体と $r=.12$ で正の相関が見られた。また、全ての下位尺度とも相関があった。

関係維持動機とは、パートナー関係維持方略尺度全体と $r=.27$ で正の相関が見られた。また、ライバルへの否定的な関わり以外の全ての下位尺度とも相関があった。

恋人・配偶者への暴力とは、 $r=.23$ で正の相

表3 パートナー関係維持方略尺度短縮版の度数および平均値・標準偏差(N=815)

	Mean	SD
1.行くと言った場所に本当に行ったかどうか確認した。 (パートナーの監視-用心)0(64.2%)1(20.5%)2(12.1%)3(3.2%)	0.54	0.82
2.ほかの男性がいる集まりに自分の〇〇さんを連れていかなかった。 (パートナーの監視-パートナーを罵る)0(58.2%)1(19.9%)2(11.5%)3(10.3%)	0.75	1.03
3.空いている時間はいつも一緒にいてほしいと頼んだ。 (パートナーの監視-時間の独占)0(53.6%)1(29.1%)2(11.4%)3(5.9%)	0.70	0.89
4.〇〇さんを嫉妬させるために集まりの時にほかの女性と話した。 (否定関わり-嫉妬の誘発)0(67.5%)1(19.3%)2(11.2%)3(2.1%)	0.48	0.78
5.〇〇さんがほかの男性と親しげに話していたので怒った。 (否定関わり-不義への罰)0(63.7%)1(23.9%)2(9.1%)3(3.3%)	0.53	0.80
6.〇〇さんでは生きていけないと訴えた。 (否定関わり-感情操作)0(66.7%)1(20.2%)2(7.9%)3(5.2%)	0.51	0.84
7.お互いに深く関わりあうことが必要だと〇〇さんに言った。 (否定関わり-関係操作)0(49.1%)1(25.3%)2(17.4%)3(8.2%)	0.86	0.99
8.〇〇さんに興味を持っている男性の欠点を〇〇さんに話した。 (肯定関わり-ライバル価値下げ)0(80.4%)1(13.5%)2(5.3%)3(0.9%)	0.27	0.60
9.〇〇さんに高価なプレゼントをした。 (肯定関わり-資源アピール)0(39.3%)1(34.6%)2(21.0%)3(5.2%)	0.92	0.90
10.〇〇さんをずっと自分のものにしたいために性的に誘惑をした。 (肯定関わり-性的誘惑)0(56.6%)1(27.9%)2(9.8%)3(5.8%)	0.65	0.88
11.〇〇さんにとって外見が「とても魅力的」であるように気をつけた。 (肯定関わり-外見アピール)0(17.8%)1(29.3%)2(33.4%)3(19.5%)	1.55	0.99
12.〇〇さんの外見をほめた。 (肯定関わり-愛情ケア)0(11.9%)1(24.8%)2(38.0%)3(25.3%)	1.77	0.96
13.できる限り〇〇さんのいうことを聞いた。 (肯定関わり-服従)0(9.9%)1(23.8%)2(43.2%)3(23.1%)	1.80	0.90
14.〇〇さんと自分がどれほどうまくいっているかを同性の友人に話した。 (公サイン-言葉)0(26.6%)1(30.1%)2(29.8%)3(13.5%)	1.31	1.00
15.ほかの人が見ている前で〇〇さんの肩に腕をまわした。 (公サイン-行動)0(46.4%)1(23.8%)2(15.1%)3(14.7%)	0.99	1.10
16.自分のあげたアクセサリーなどを身につけるように頼んだ。 (公サイン-装飾品)0(65.6%)1(21.6%)2(10.1%)3(2.7%)	0.50	0.79
17.自分の〇〇さんはわがままだとほかの人に言った。 (ライバル-パートナーの価値下げ)0(60.5%)1(17.9%)2(11.9%)3(9.7%)	0.71	1.01
18.自分の〇〇さんを見ている男性をこらした。 (ライバル-同性脅し)0(88.2%)1(7.4%)2(3.9%)3(0.5%)	0.17	0.50
19.友人に頼んで〇〇さんに興味を持っている人に嫌がらせをした。 (ライバル-ライバル攻撃)0(97.2%)1(2.3%)2(0.4%)3(0.1%)	0.04	0.23
20.〇〇さんの携帯を勝手に見た。 (〇〇さんの監視-用心)0(76.8%)1(11.2%)2(8.6%)3(3.4%)	0.40	0.80
21.ほかの男性が集まっている場所に〇〇さんを近づけないようにした。 (パートナーの監視-パートナーを罵る)0(80.6%)1(14.6%)2(4.4%)3(0.4%)	0.25	0.55
22.ほかの誰かに会う機会を減らすために空いている時はなるべく一緒に.. (パートナーの監視-時間の独占)0(67.9%)1(19.0%)2(10.2%)3(2.9%)	0.49	0.79
23.〇〇さんを怒らせようとしてほかの女性に興味があるようにふるまった。 (否定関わり-嫉妬の誘発)0(72.8%)1(17.7%)2(7.9%)3(1.7%)	0.39	0.71
24.もし浮気をしたら別れると〇〇さんを脅した。 (否定関わり-不義への罰)0(74.6%)1(14.4%)2(8.0%)3(3.1%)	0.40	0.77
25.自分にはあなたしかいないと〇〇さんに言った。 (否定関わり-感情操作)0(57.7%)1(20.1%)2(14.0%)3(8.2%)	0.73	0.99
26.結婚してほしいと〇〇さんにせがんだ。 (否定関わり-関係操作)0(71.5%)1(16.0%)2(9.0%)3(3.6%)	0.45	0.80
27.ほかの男性はバカだと〇〇さんに言った。 (否定関わり-ライバル価値下げ)0(89.9%)1(7.9%)2(1.3%)3(0.9%)	0.13	0.45
28.高級なレストランに〇〇さんを連れていった。 (肯定関わり-資源アピール)0(68.3%)1(16.2%)2(12.1%)3(3.3%)	0.51	0.83
29.絆を深めることを目的に〇〇さんと関係をもった。 (肯定関わり-性的誘惑)0(47.0%)1(18.0%)2(17.8%)3(17.2%)	1.06	1.15
30.自分をおしゃれと思うか〇〇さんに確認した。 (肯定関わり-外見アピール)0(61.3%)1(25.5%)2(10.1%)3(3.1%)	0.56	0.80
31.〇〇さんに何度も好きだと言った。 (肯定関わり-愛情ケア)0(19.1%)1(28.6%)2(22.2%)3(30.1%)	1.64	1.10
32.〇〇さんが言ったことにはすべて従った。 (肯定関わり-服従)0(32.9%)1(37.4%)2(24.9%)3(4.8%)	1.02	0.87
33.〇〇さんのことをほかの男性に自慢した。 (公サイン-言葉)0(39.0%)1(31.9%)2(21.0%)3(8.1%)	0.98	0.96
34.ほかの男性が同じ部屋にいるときに〇〇さんを自分の近くにさせた。 (公サイン-行動)0(68.1%)1(22.9%)2(6.6%)3(2.3%)	0.44	0.72
35.〇〇さんが自分のものであることを示すためにアクセサリーなどをあげた。 (公サイン-装飾品)0(69.7%)1(19.9%)2(8.6%)3(1.8%)	0.43	0.73
36.〇〇さんの悪口をほかの男性に言った。 (ライバル-パートナーの価値下げ)0(61.7%)1(19.4%)2(12.8%)3(6.1%)	0.64	0.93
37.〇〇さんを見た男性を不機嫌そうに見た。 (ライバル-同性脅し)0(87.5%)1(8.5%)2(3.3%)3(0.7%)	0.18	0.51
38.〇〇さんに言い寄った男性をこらしめた。 (ライバル-ライバル攻撃)0(93.4%)1(5.2%)2(1.5%)3(0%)	0.08	0.33

注1)0=一度も行ったことはない 1=めったに行かなかった

2=数回行ったことがある 3=しばしば行ったことがある

注2)男性版の項目である。女性版では項目内の「男性」と「女性」が入れ替わる。

注3)カッコ内は左が領域名、右が方略名の略

関が見られた。下位尺度では、パートナーの監視、否定的な関わり、ライバルへの否定的な関わりで正の相関が見られた。

よって、交際期間に関しては大学生のみ、攻撃性に関しては短気、言語的攻撃との相関であったが、おおむね期待された関連が見られ、妥当性が確認された。

交際期間の短い大学生においては、パートナー関係を維持するという目的をこれらの行動がある程度果たしていると考えられる。しかし、交際期間がある程度長くなり、結婚にまで至っている場合は、さまざまな要因から別れることが難しい。そのため、パートナー関係維持方略以外の多様な要因が関係の維持に影響していると推察される。また、肯定的関わりでむしろ負の相関が見られたことは、結婚して関係が長くなると、関係を維持するための肯定的な努力が減少することを意味すると考えられる。

表4 各変数とパートナー関係維持方略尺度との相関係数

	尺度全体	パート ナーの監 視	否定的な 関わり	肯定的な 関わり	公への所 有のサイ への関わ	ライバル への関わ
交際期間(大学生)	.25**	.24**	.19**	.21**	.22**	.12
交際期間(一般成人)	-.08	.01	-.06	-.15**	-.01	.07
攻撃性全体	.10	.07	.12**	.06	.07	.09
攻撃性	短気	.12**	.08	.17**	.09	.09
	言語的攻撃	.14**	.04	.12**	.12**	.16**
	身体的攻撃	-.01	.03	.00	-.04	-.02
	敵意	.06	.06	.05	.03	.01
見捨てられ不安	.12**	.12**	.12**	.11*	.11*	.12*
関係維持動機	.27**	.09*	.25*	.30**	.19**	.05
暴力	.23**	.30**	.25**	.07	.08	.36**

d)各変数との関連

以下はデータ3の一般成人への調査について分析を行う。

まず、人口統計学的変数の居住地、性別、年代、最終教育歴、収入状況、飲酒喫煙習慣によって、パートナー関係維持方略尺度の使用に違いが見られるか検討するため、*t* 検定および一元配置分散分析を行った。最終教育歴は高卒以下・大卒以上の2群に、収入状況は両親の扶養にあると思われる学生を除き、~300万円・301万~600万円・601万円~の3群に分けた。

その結果、尺度の合計得点で差が見られたのは、年代および飲酒習慣であった。年代では、20代でその他の年代よりも有意に値が高かった。また、飲酒習慣では、週2日以下の飲酒習慣のある群(n=125)のほうが、飲酒習慣のない群(n=232)よりも値が高かった。週3日以上飲酒習慣がある群(n=147)はほかの群との差はなかった。居住地、性別、教育歴、収入状況、喫煙習慣ではいずれも差が見られなかった。

20代は婚姻関係にない対象者が多く、いつでも別離の可能性があるため、相手をつなぎとめようとする行動を多く行っていると考えられる。

また、アルコール依存など飲酒習慣がパートナーに対する暴力につながるという知見は多く、本研究で適度な飲酒習慣がパートナー関係維持方略に影響していたことも関連すると思われる。

e) モデル図の検討

交際当初の関係満足度・相手との心理的距離、ソーシャルサイズの大きさが、パートナー関係維持方略の2つのカテゴリー(相手への操作、ライバルに対する操作)に影響し、相手に対する暴力につながり、交際・婚姻期間、現在うつ・不安傾向に影響するというパス解析モデルを構成して検証した。分析の際、母数の推定方法には最尤法を用いた。このモデルにおいてはそれぞれの水準の変数間、誤差間に共分散を仮定した。有意確率5%以上のパスを削除してモデルを修正した。最終的に図2の結果が得られた。モデルの適合度は、 $\chi^2(22)=42.68$, GIF=.98, AGIF=.96, CFI=.98, RMSEA=.04, であり、十分な値が得られた。

初期の関係に満足しているほど、相手をつなぎとめたいと思うためにパートナー関係維持方略を多く使い、その行動がエスカレートして暴力につながっていた。また、攻撃的な内容のパートナー関係維持方略および暴力は交際期間に正の影響を与えており、これらの行動がむしろ相手との関係性を維持していることが示された。一方で、暴力は関係満足度を低め、相手との心理的距離を広げていた。よって、恋人・配偶者への操作は、エスカレートすると暴力につながり、関係性を維持することが明らかとなった。

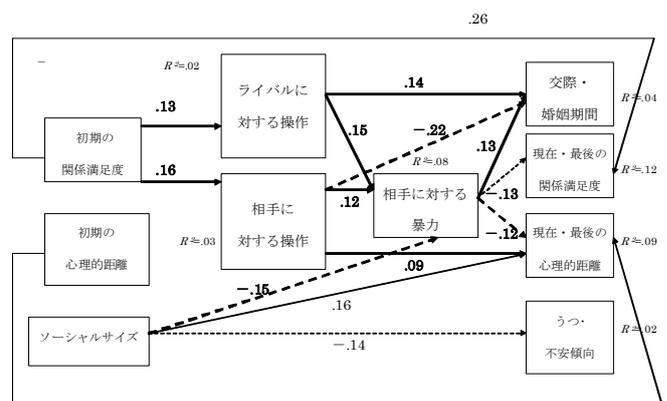


図2 .19パス解析モデル図

④まとめ

本研究の結果から、調査対象者の20%~40%の割合で、パートナーへの否定的な操作が行われていたこと、恋人・配偶者への操作はエスカレートすると暴力につながり、病理的な関係性を維持することが明らかとなった。今後は、操作から暴力へ発展するには

のような要因が影響するののかについて明らかにすることで、暴力に至る前の操作の時点で介入する方法について検討する必要がある。

⑤主な引用文献

- Buss, D. M. (1988). From vigilance to violence: Tactics of mate retention in American undergraduates. *Ethology & Sociobiology*, **9**, 291-317.
- Buss, D. M., & Shackelford, T. K. (1997). From vigilance to violence: Tactics in married couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 346-361.
- Buss, D. M., Shackelford, T.K. & McKibbin, W. F. (2008). The Mate Retention Inventory-Short Form (MRI-SF). *Personality and Individual Differences*, **44**, 322-334.
- Shackelford, T. K., Gotetz, A. T., Buss, D. M., Harald, A. E. & Sabine, H. (2005). When we hurt the ones we love. *Personal Relationships*, **12**, 447-463
- Kaghobadi, F., Staratt, V.G., & Shackelford, T.K. (2008). Male mate retention mediates the relationship between female sexual infidelity and female-directed violence. *Personality and Individual Differences*, **44**, 1422-1431.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

- ① 寺島 瞳 他者を操作することに攻撃性および信頼感を与える影響. 日本健康心理学会第22回大会. 2009年9月7日-8日(早稲田大学)

6. 研究組織

(1)研究代表者

寺島 瞳 (TERASHIMA HITOMI)

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・助教

研究者番号：30455414

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし